

## 現代大学生の教室で座る位置

加藤 典子<sup>\*1</sup>

### Where to sit in the classroom in college classes

Noriko Kato <sup>\*1</sup>

The main purpose of this paper is, by introducing Shimada (2001), to analyze what the phenomenon means, which many students want to sit on the backward seats in the classroom. Analyzing where to sit in the classroom contributes to the pursuit of better classes in colleges. According to his study, the reasons why they tend to sit backward are not only the purpose of chatting, sleeping, or using their cell phones, but also that they would like to escape from the cold reality that they can't understand the class, and that many students are always bound by their friends who want to sit backward. In order to make them sit forward seats in the classroom and to listen to the class in a good manner, Shimada (2001) proposes that teachers should specify where the students sit. That is to say, it is very important for teachers not only to improve the contents of their own classes, but also to devise alternative ways of making their students concentrate on the class, like specifying seats.

## 1. はじめに

### 1.1. 目的・概要

大学教師であるならば誰しも、クラス全員が良い出席率で、良い授業態度で（私語も無く、居眠りもせず）、熱心に授業に参加してくれる事を常に願っているであろう。しかしながら、現実はその正反対である。学生達の授業態度は年々悪化する一方であり、現代に至っては、私語・居眠りに止まらず、携帯電話でメールをやりとりしたり、ゲームをしたり、インターネットに接続したり等、教室という空間は無法地帯と化している。今となっては、教室は授業を受ける場というよりも、学生達が自分の好き勝手に時間を過ごす場と表現した方が妥当であろう。

そのような悲惨な授業教室を更に細かく見てみると、授業態度の悪さは特に教室後方の座席で非常に目立つ。後方であれば、教師から見えにくい為、何をしても構わないであろうという安心感が、教室後方の無法地帯化を生み出しているのであろう。筆者自身も、教室後方で騒ぐ集団を厳しく口頭で注意するのみならず、わざと最前列に移動させて

座らせる事により、静かにするよう促した経験もある程である。つまり、教室前方は真面目に授業を受ける場であるが、後方はやる気の無い学生が座り自由気儘に好きな事をしていて良い空間であるという事が、暗黙の了解・認識となっているのである。これは、教室の席は人気の高い後方から埋まって行き、教壇に近い前方の座席はいつも売れ残るという現状からも明白である。このように、学生の授業に対する集中度と、教室のどこに座るかという位置には、深い関係がある事はまず間違い無いであろう。

一方、学生の座席の心配をする暇があるくらいなら、教室のどこの位置に座ろうが全員真剣に授業を聞き、熱心に学んでくれるような、学生の興味を引く質の高い素晴らしい授業が出来るよう工夫し専念する事の方が先決ではないかという考え方も否めない。しかし、筆者が実用性の高い良い授業を出来るよう最大限に努力したところで、教室後方に座る学生達も熱心に取り組んでくれる程、現実には生易しいものではなかった。教師がどのような授業をしようと、座席の位置と学生の授業態度には切っても切れない密接な関係があるようである。

<sup>\*1</sup> 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師  
2004年9月10日 受理

故に、学生のやる気を高める為には、質の良い授業を心掛けるだけではなく、教師側が学生の座る席についてもある程度の指示を出し、積極的に介入して行く必要があると強く感じた。そこで筆者は、学生達を教室の1列目から学籍番号順に座らせる方法を試してみたところ、その結果として、大変静かにはなったのだが、仲の良い友達と離れた事により、おしゃべり相手が居なくなり、つまらない・寂しい等の理由で大半の学生が寝てしまい失敗に終わった。大学生達は、中学・高校までとは違って大学では自分の好きな席に仲の良い友人達と自由に座れる事を日々楽しみにしている事をも考慮すれば当然の結果と言えるかもしれない。以後、学籍番号順座席指定は止め、友達同士離れ離れにならない新たな方法として、席は自由で良いが教室の真ん中より後ろの席に座ってはいけないという指示を出してみた。すると、仲良し同士は少々私語があるものの、全くの自由席だった場合や学籍番号順に比べれば、居眠りや私語も減り、授業に少し活気が出て来た。このような結果を得ると、今や座席に関してまでも教師が積極的に介入し指示を出して行く事が大学においていかに重要かという事をますます強く感じざるを得ない。

もう大人であると見なしている大学生に対し、座席に関する指示までご丁寧に出し、随分とお節介なことをしているように思えるかもしれないが、そこまで教師側が細かく規制し介入し面倒を見ないと勉強に集中してくれないのが、現代大学生なのである。この点をしっかり把握し、この現状に対応するには、現代大学教師も変わる必要がある。質の高い授業を情熱を込めてやれば、学生達については来てくれるという時代はもはや終わりを告げ、学生の座る席まで考慮し、より一層工夫された、きめ細やかな授業が要求される新たな時代に突入した事を大学教師は自覚しなければならない。そこで、授業内容のみならず、学生達が一体どのような心境でいつも教室の席に座り、教室をどのような空間と認識しているのか、またそのような学生達に対しどのように大学教師は座席を提供すべきなのかまで、追究・検討した上で授業を行う必要がある。

しかし、ある科目をどのように教えたら良いのかという具体的な教授法（例えば、英語をどのように教えたら良いのかという英語教授法等）であれば、

確固たる研究分野として存在しているが、教授法以外の要素、つまり、本稿で問題となっている「学生が座る席にどのように教師が対応したら良いか」等というような研究分野は存在するのであろうかと疑問に思いつつ探していたところ、大変興味深い研究に出会った。島田博司(2001)「大学授業の生態誌（要領よく生きようとする学生）」(以後、島田(2001)と記す)である。

島田(2001)では、現代大学生のキャンパスライフ全般を「要領良く生きる大学生」というキーワードで描写し、教室後方に座りたがる学生達の心理や、学生達の席に対するこだわりや、授業直前の席取り合戦や、試験直前のノートのやりとりやコピーに至るまで、学生達の細かい行動を分析している。特に座席に関しては、教師が学生全員の座席を決めてしまう「座席指定制」を実際の授業で導入し、それに対し学生がどう感じたか、自由席よりも勉強に集中出来るようになったか等、細かいアンケート調査の結果まで詳細に記している実証的な研究である。

本稿では、島田(2001)を中心に上げつつ、筆者の授業体験も通して、後方の席ばかり好む現代大学生の座席事情を分かりやすくまとめ、また、そのような座り方になってしまうそもそもの原因を作った大学教師の傾向・問題点も指摘し、それらに対する島田流解決策と筆者の考える解決策を紹介し、現代の大学生に、よりふさわしい授業を提供する事への貢献を大きな目的とする。但し、本稿で提案する授業スタイルは、実際の授業で行い成果が得られたという実証的な研究には至っていない、あくまでも研究前段階の研究ノートであることをご了承いただきたい。

## 1.2. 構成

本稿は以下のように構成されている。2章では、現代大学生が何を考えながら自分の座る席を決めるのか、また、特に後方座席に座りたがる理由・学生心理を、島田(2001)を参考にしながら、突き止め、3章では、沢山の学生達がこぞって後方座席を占領し、好き勝手に授業中を過ごすようになってしまったという、もともとの原因を作ったのは教師の自由放任な態度にある事を指摘する。4章では、学生達を後方座席に追いやってしまった張本人・教師側は、学生をより前方に座らせ、授業態度を改善させる為

に、授業内容を向上させるだけではなく、座席指定をしたり、発言制の授業をしたりして、学生の顔と名前をしっかりと覚え、積極的に学生の領域に入り込み、規制していく工夫が必要である事を主張する。そして、最後に5章で結論を述べる。

## 2. 現代大学生の座席事情

現代大学生は、教師達が考えている以上に、座席に対するこだわりやイメージを持っているようである。本章では、島田(2001)における学生描写を参考にしながら、このこだわりを解明し、現代大学生が一体何を考えながら現在の席の座り方をしているのか(特に後方席の人気)を探る。より詳しく座席に関する現状を把握する為にも、この章を2つに分けて、2.1.で大学生の座席の位置に対する心理・こだわり・イメージを提示し、2.2.で座席と友達関係には深い関係があり、複雑な人間関係の下に座席を決めているという学生達が少なくない現状を紹介する。

### 2.1. 座席の位置と学生心理

中学・高校までとは違って、大学に入ると自由席になり、今までの座席指定という束縛から解放された喜びを感じ始める。座席指定から自由席に変わった、それは一見些細な変化に思えるが、この「大学では自由な席に座れる」という事態が深刻な座席現象「後方座席人気」を生み出してしまふ。自由席になれたという事をきっかけに、高校までとは違った「自由な」大学生活を謳歌する為に、授業中までも「自由に」過ごすべきだと思い込んでしまふ。つまり、島田の研究でも指摘されているように、大学で学生達に与えてしまった自由が、いつの間にか、「授業時間＝自由時間」(島田 2001; 144)」という恐ろしい図式の下に解釈されているのだ。

授業中、より自由に過ごすにはどうすれば良いのか? 当然、教師から見えにくい場所、つまり後方の座席を確保すれば、おしゃべり・居眠り・雑誌を読む・携帯電話をいじくる等、自分の好き勝手な自由な事が授業中に出来る。これが、後方座席人気の大きな理由である。ここまでは、誰でも見抜ける事であろうが、後方座席人気にはまだ他の根深い原因がある。

上述のように、自由を求めて座りに来る後方座席の授業態度が悪くなればなる程、真剣に学びたいと思っている学生は、静かな環境である前方座席を選んで座る事になる。前方に座って熱心に授業を聞く、これほど素晴らしい姿勢は無いであろうに、今となつては、その行為は「ダサイ」以外の何者でもない価値付けられてしまう何とも悲しき時代である。島田(2001)でも指摘されているとおり、現代大学生にはそもそも「マジメはカッコ悪い。だれかに勉強へのやる気をみせることはダサすぎる。(島田 2001: 154)」という価値観が蔓延している為に、前方の席に座ることは真面目でカッコ悪くてダサイ事というイメージが学生間で出来上がってしまったのである。

故に、うっかり前方の席に座り、カッコ悪いダサイ奴と思われたくない、そして、クラスの中で浮いた存在になりたくないという思いも、後方座席人気に拍車をかけていたのである。前方座席はただでさえ、教師から見え易く、質問されたり指名されたりしそうで怖いというイメージがあるところに、「ダサイ奴」というレッテルまで貼られる危険があるのだから、不人気なエリアになるのも当然である。

一見、華やかに見える「大学授業における自由席制度」は、思わぬ形で、質の悪い後方座席人気を生み出していた。ただ単に、教師の視線から逃れたい、教壇から少しでも遠い位置に座って好き勝手な事をしたいだけならまだしも、前方座席に座る学生に悪いイメージが付くという、まるでイジメが見え隠れするような学生心理までもが、後方座席人気に繋がっている現状を大学教師は是が非でも把握しておかなければならない。

### 2.2. 座席の位置と友達関係

学生達は、前セクションで述べた座席に対するイメージ・こだわりのみならず、友達関係までも重んじながら慎重に席を選んでいる。高校までの座席指定から解放され、自分の好きな友達と好きな席に座れる自由をやっと手に入れる事が出来たにも関わらず、華やかで楽しいはずの自由が、またもや、友達関係を巻き込む悲惨な座席事情を生み出している事に、お気付きであろうか。

2.1.で記したように、前方座席は色々な意味で人気の無いエリアであるが、たまにはどうしても前の

方に座って真面目に一人静かに勉強したいと思う場合もあるだろう。しかし、そう簡単に自分一人だけの意思で前方に座って真面目に勉強というわけにいかないのは、友達関係に知らず知らずのうちに束縛されているからである。

この事は、島田(2001)にわかりやすくまとめてある：「友達がいると、友達への気遣いにエネルギーをかなり費やす。友達への気遣いのあまり、さらに友達づきあい上、友達を邪険にできず、自分が本当にしたいことができなくなる。話しかけられると、断れない。後ろに座ろうといわれると、流されてしまう。(島田 2001; 161-2)」。正にこのような人間関係による束縛により、座る位置は友人同士隣り合う近い場所にすべきという事が当たり前・暗黙の了解になってしまっているのです。よっぽどの強い意志でも持たない限り、一人静かに離れた席で勉強する事は難しいようだ。友達関係も席決めに大きく関与している。

また、授業前の休み時間早めに教室に行くと、熾烈な席取り合戦（特に後方座席の席取り）が行われている光景を、たまに筆者自身も目にする事がある。更には、まだ前の授業が終わってもいないのに恐ろしく早めに教室ドアの前で待機している学生も居て、遅刻しないように良い心がけだ、等と思っているとそうではなく、より後ろの席を確保したいが為に早く来ているだけの事である。前の授業が終わり扉が開くと慌てて後方座席に駆け寄り荷物を撒き散らし、友達の分まで席を確保するのだ。そこまでしてでも、後方座席に仲の良い友人達と座りたいわけである。残念ながら出遅れて後方座席という特等席が取れなかった軍団は仕方なく、他に空いている前方座席に悲しそうに移動してくる。こうして、席取り合戦に負けたグループはすっかり活気もやる気もなくしてしまい、つまらないと言わんばかりに授業が始まると眠ってしまう傾向にある。

席取りに失敗した学生はそのグループの中でさぞかし責められる事であろう。島田(2001)によると、仲良しグループの中で、代表で席取りをするのは、いつも同じ人であるか、交代で順繰りにやっているかは、グループによって様々らしい。いつも、同じ学生に席取りをやらせているグループでは、その学生はさぞかしストレスが溜まり、仲良しと一緒に座る為とはいえ、このしがらみにうんざりしてくる事

であろう。要領よく仲良し友達同士で後方座席に座るにも、席取り合戦というグループ同士の戦いや、グループ内のメンバー同士の責め合い等を経なければならず、自由で楽しいはずの自由席がすっかり不自由を招いているようである。

本章では、現代大学生の座席に関する実態を、座席に関するイメージ・こだわりや、友達関係と照らし合わせて紹介した。このことにより、最近の若い大学生は単に不真面目でやる気の無い学生が増えてきたから後方座席にばかり座る、だから最近の学生が悪い・親の躾けが悪いと、全て学生側の責任に押し付けてしまえば良いというような単純な構図ではない事がわかり頂けたと思う。自由を学生に与えずってしまった大学側・教師側が招いた惨事と言っても過言ではないだろう。次章で、これらの問題点を追究する。

### 3. 教師側の問題点

ここでは、学生達にやる気をなくさせ、後方座席に追いやってしまった原因は、大学教師の学生に対する放任主義にある事を指摘し、より良い授業を行う為にも、早急に改善しなければならない問題点を明らかにしておく。一言で言ってしまうと大学側・教師側の自由放任主義が引き起こす、質の悪い後方座席人気であるが、細かく言えば、①大学生達を大人扱いする放任、②生徒に対する諦めの見え隠れする放任授業、③学生への観察力・関心の薄さによる放任、という3つに分けて取り上げの方がわかり易いであろう。この3種類の放任主義を以下の3つのセクションで、教師側の問題点として提示する。

#### 3.1. 大人扱いし過ぎた帰結

2章で紹介したような悲惨な座席事情が生み出されてしまう原因の一つとして、島田(2001)の53～54頁にも記されているとおり、学生を自立した大人として扱おうとする為に、全てを学生個人の責任にして、出席も取らない、遅刻もチェックしない、後方座席にばかりダラダラ座ってやる気の無い学生を注意しない、おしゃべり・内職・居眠りする学生を注意しない・・・等の授業方針を取る教師が多かったわけであるが、このように、あまりにも教師達が何もせず野放しにし過ぎた帰結が、後方座席の無

法地帯化となって現れたのである。大学教師側としては、もう子供ではないのだから、自分で善悪を判断し授業中何をすべきか自分で考えよ、大人として君達を扱うのだから、わざわざ注意したりはしない、私語が悪い事くらい自分で気付いて自ら授業態度を改めよと、心の中で叫びつつ、実際に声に出して学生を注意したりはしないのであろう。昔の学生であれば、このような意図をすぐに理解し、自ら態度を戒めたであろう。

しかし、現代の学生は、教師側の「自立した大人を育てよう」という意図に反して、大学は授業中何をしていても注意されない楽で自由な場所、好き勝手に出来る場所、何をしても許される場所と思い込み誤解し、さすがに教師に近い前方座席で堂々と授業中すべきでない事をする勇氣は無いので、後方座席に居座り、休み時間・授業中に関わらず、自分の好き勝手な事をやり、大学生生活の自由さを謳歌する。まるで、授業中に勉強以外の色々な事を自由におかないと損だと言わんばかりに、後方座席の自由を謳歌する授業態度はエスカレートしていく一方である。

このように、現代大学生達は、本当は自立した大人として扱われている事をすっかり誤解し、自由・楽へと解放された喜びを満喫し、自由を乱用し、度の行き過ぎた自由が生まれてしまい、後方座席のマナーの悪さ、つまり、教師から最も離れ最も注意されにくい後方座席で自分の好きな事をやって授業中自由に過ごしたいという悪い欲求を芽生えさせた。また、後方座席＝自由・天国という図式にでも表したら良いのであろうか、この大変魅力的なエリアを沢山の学生が狙って我先にと席取りをし、2.2でも紹介したような友達関係によるストレスを溜めてまでも後方座席に座りたいという、いかにも精神的に悪そうな事態をも引き起こしている。

もう、大学生は大人なのだから、全ては自分の判断に任せる、教師は細かい事は何も言わない・・・という姿勢が、学生にとって都合の良い「自由」の解釈、質の悪い後方座席人気、友達関係に振り回される「不自由な自由席」の原因だったのである。「自立した大人を育てる」という建前を隠れ蓑にして、学生達を野放しにしておく事はもう許されない時代の到来である。中学生・高校生の担任になったような気持ちで、もっと学生一人一人と丁寧に向き合

う姿勢を大学教師は持つべきである。

### 3.2. 諦めが見え隠れする放任授業

前セクションで見たように、大学生を大人扱いし自立させようとして与えてしまった自由は一人歩きを始め、授業中に更に自由な事をしようと多くの学生達が後方座席を彷徨うきっかけを作り出してしまった。この大学側の姿勢は、勉強するもしないも学生の責任、期末テストで良い点を取れるか取れないかも学生の責任、故に、授業を聞くも聞かないも学生の責任なのだから、授業を聞きたい人だけ勝手に聞いていれば良い、聞きたくない人は教室後方で好き勝手な事でもしていれば良い、という半ば諦めに似た放任授業をも生み出したのではなかろうか。

このような放任授業により、授業を理解するもしないも個人の自由となり、学生達が授業内容をしっかりわかってようがいまいが、中学・高校時の手取り足取りの面倒見とは違って、放っておかれっぱなしで誰からも救いの手を差し伸べられる事も無い。となると、どうせ懇切丁寧に教えてもらえないのだからと、学生側も、どうせ理解出来ないからついて行けないと氣力を無くし、どうでも良い、もう学ばなくて良い・・・という諦めの境地の一途を辿る。

このような心理が芽生えるからこそ、学生達はますます後方座席に埋もれたいくなる。つまり、わからなくてついて行けない不安を解消する為にも、とりあえず、せめて、わからない諦め仲間同士みんなと一緒に居たいと感じるようになる。これは、島田(2001)でも記されている「いっしょ願望 (2001; 154)」であり、この願望を達成する為にも、より後ろの座席に移動する必要があるのだ。詳しく説明すると、「前だと振り返りにくく、みんなの様子が読みにくい。その点、後方座席ではみんなの様子をみわたせる。みんなといっしょにいて、みんなと同じことをする方が安全(島田 2001: 154)」という事で、授業について行けない者同士固まって、学生達の後姿を全体的に見渡しながら、みんな一緒である事を確認し合い、気を紛らしているのである。これだけでも後ろに座りたい確固たる動機が存在していると言えるのに、みんなと一緒に後方に埋もれる現象は、また更なる悪い座席イメージを生み出すと考えられる。

それは、セクション2.1.で記したような、前方座席の学生＝ダサイというイメージの助長である。前段落で説明した、後方座席を占める「勉強諦め軍団」は、前方に座る真面目な学生達を羨みつつ妬み、何とか自分達の存在を正当化しようとする為に、後ろに座る「脱マジメ」の方が粹でカッコいい事であり、前に座って必死に真面目に勉強するのはダサイという勝手な価値観を作り上げ、満足しようとする。この事は、決して授業について行けないわけではない真面目な学生達までも、妙な視線で見られるのを避ける為に、後方座席に入り込み埋もれようとする悪循環を生み出す。沢山の学生が後ろに座り淀んだ空気・活気の無いクラスの雰囲気という光景が教師の目に入っても、それを注意する事を諦め、前に座っている数人の学生のみを対象とした諦め・放任の授業をしてしまう教師も出現し、後方座席の学生は所詮自分は相手にされていないと、ますますやる気を喪失し、雰囲気は悪くなるばかりである。

諦めの境地に浸っている学生を発見しても、ここは大学なのであるから自分で立ち直ってついて来いと、突き放してしまう放任授業が、ますます学生達の諦めを煽ってしまう。この悪循環を断ち切るのは、教師しか居ない。教師が変わらない限り、「勉強諦め軍団」を後方座席に追いやり続け、彼らは後方座席という安全地帯にこもり切り、何も学ばない大学生活を余儀なく過ごす事になってしまう。

### 3.3. 学生への関心の薄さ

前述のように、自由放任が当たり前となっている大学授業だからこそ、大学教師の学生に対する興味・関心も、中学・高校教師とは違って、極端に薄れるのは言う間でも無いであろう。100人を超えるような巨大クラスでは仕方が無いかもしれないが、学生への関心の低さは、学生の顔と名前を一致させて覚えている大学教師が少ない事に如実に表れていると言える。学生の顔と名前を覚えていない程の関心の薄さは、学生達に「どうせ、名前を覚えていないから、何をやってもバレないだろう」という安心感や気の緩みを与えてしまう。故に、授業中に勉強以外の事を好き勝手にやりたくなる気持ちを持ち立ててしまい、さすがに前方座席で露骨に態度の悪さを見せるのは控える為、後方座席へ移動し、物理的に教師から見えにくい位置であるとい

う安心感と、名前・顔を覚えられていない安心感に包まれながら自由気儘に授業時間を過ごすという、悪質な後方座席人気の要因となる。

また、教師から顔と名前を覚えられていないという事は、学生に安心感を与えるだけでなく、同時に教師に対する恐怖感をも募らせる。中学・高校までは教師が学生の名前を覚えてくれる事により、教師を少しは身近な親しみやすい存在と思ってくれていたであろうに、大学に入ると、顔も名前も覚えてくれない教師達は、教壇という全く学生とは別の遠い世界で生きている見知らぬ怖い人と言わんばかりの遠い存在へと変わってしまう。また、ただでさえ、現代若者はコミュニケーション能力を著しく欠いていて、年齢・性別が違う相手どころか、同い年・同じクラスの人に対してさえ自分の仲良しグループ外であれば口も利けない深刻な状態であるところに、ましてや、年齢・身分が全く違う教師とコミュニケーションを取ってみようと思うはずもなく、名前も顔も覚えてもらえないとなると、ますます、大学教師独特の威圧感を感じさせられ、ただただ大学教師を怖い存在としか思えなくなる。大学生達の教師嫌いがここで一気に加速し、近くに來られるだけでもストレスとを感じるようになり、そんな怖い教師から1メートルでも1センチでも離れて座ろうとする為に、当然後方座席への移動に拍車をかける。

学生の顔・名前もきちんと覚えられない無関心さが、親しみやすさの薄れた怖い教師像を作り出し、学生にストレスを与え、後方座席に追いやる事になったわけである。

そして最後に、顔や名前の丸暗記とまで行かなくとも、せめて、何故学生達はこぞって後ろの席にばかり座ろうとするのかという原因や、後ろに座ってたむろする学生達の本心を見抜こうとする注意力や観察力を教師達が持っていれば、現在のような悲惨な後方座席の無法地帯化は避けられたであろう。後ろの座席に人氣が集中するのは、単なる教師嫌いや後ろで内職・居眠り・おしゃべりを少ししたいという程度の単純な理由だけであれば、教師も簡単に見抜けて、注意さえすれば簡単に解決するであろう。ところが、前セクション3.2.でも説明したように、勉強について行けず「勉強諦め軍団」となって後方座席に座り気を紛らし、自分達を正当化する為にも、前方に座るのはカッコ悪いと勝手に決めつけ、本来

真面目に前に座って勉強したい人まで周りの視線を恐れながら後方座席に無理やり移動したり、友達関係に縛られて後方座席に座らざるを得ない等の複雑な事情を抱えて後方に座る大学生の胸中までも、現代となっては教師が見抜いていかなければならない必要が出て来た。特に、「勉強諦め軍団」の本当の心の中の孤独や授業について行けない不安を見抜けずに、彼らは教室後方で勝手な事ばかりするクラスのお荷物・邪魔者と見なして無視してしまう教師は多い事であろう。

学生が後ろにばかり座ってしまう本心を見抜けない程、大学生への興味・関心が薄れてしまっている現代大学教師の放任さ加減が、学生と教師の間の教室内の物理的距離も、心的距離も遠ざけてしまっている。やはり、学生一人一人の名前・顔を覚えるのは勿論のこと、一人一人の胸中也読み取る心意気が大学教師にも求められる時代になったと言える。

#### 4. 対処法

この章では、上記のように、学生を後ろにばかり座らせる原因を作ってしまった教師が、どのように変わり、具体的にどのような対策・対処法を採って学生に接すれば、学生が後方に縮こまって埋もれてしまう事態を防げるかを、島田流解決策(セクション4.1.)と、筆者流解決策(4.2.)の2つに分けて紹介する。

##### 4.1. 島田流解決策

前章までで、大学に入ってやっと仲の良い友達と隣り合って好きな位置で勉強出来る自由席を謳歌するのも束の間、友達関係というしがらみに束縛され、面倒な席取り合戦へ参戦しなければならない、また、前方に座れば真面目でカッコ悪い奴と変な目で見られる等など、月日を経る毎に、不自由・不都合が生じ、多少のストレスを溜めながら授業を受けている実態が明らかになった事から、島田(2001)では、授業に座席指定を取り入れ、学生達を「自由という名の不自由」から解放する事に成功している。

実際に、座席指定が導入された島田の授業は、受講者の学年は同じであるが、様々な学科の学生が受講する選択科目であった。ただランダムに学科をこ

ちゃ混ぜにして誰がどこに座るのかを決めるというわけではなく、大体どの辺りに座りたいか希望を出してもらうという事前調査をし、その希望に添いつつ、前後(つまり縦の列)には同じ学科の学生を配置し、隣は違う学科の学生になるように配置している。また、学生達に最も嫌われる1、2列目は空席にするが、なるべく全員が教室前方に納まるようになっていて、横は1列おきに座るように配置してある(詳細は、島田(2001)の176~177頁を参照のこと)。ただ単に勝手に教師が座席を指定するというのではなく、事前調査を行って希望を取ったり、同学科の学生を前後に配置して、前後左右誰も知らない人ばかりという寂しい状態にならないようにする等、細かい配慮がなされている見事な座席指定である。そして、学期末にはこの座席指定の感想や授業の集中度などを問うアンケート調査を行っている。

座席指定の結果は良好だった事が著作から読み取れる(島田(2001)の187頁にアンケート結果が記されている)。やはり、座席指定が嫌で、かえって授業がつまらなくなり、やる気が無くなったという少数意見も存在したようであるが、大体75%以上の学生達が、座席指定による授業に満足し、授業の雰囲気良かったと受け止め、自由席の時よりも学習環境を改善出来て、集中度が高まったと感じているというアンケート結果が、島田の研究に示されていた。そして、勿論、おしゃべりも格段に減り、仲良しと離された事により、友達に頼らず自分で責任を持って授業を聞き理解しなければと思い、授業に集中出来るようになったという結果も得られているようだ。また、更なる長所として、新たな友達作りが出来て満足している事が浮き彫りとなっている。前章でも取り上げた最近の大学生のコミュニケーション下手に歯止めをかけ、友達の輪を広げるきっかけまで与えてくれる素晴らしい手段にまで、座席指定はなっているようだ。

上述のような素晴らしい結果を知ると、早急に座席指定をより多くの大学教師が取り入れるべきだと考えがちであるが、多少の問題も残る。

島田の研究で座席指定を導入したクラスは選択科目であった為、違う学科の新しい友達が出来るとのメリットがあったが、必修科目でクラス全員が既に顔見知り、仲良しグループや仲の良し悪しが既

にしっかり決まっている場合に適用すると、その仲良しグループが離れ離れになってしまったり、仲の悪い学生の隣に座らされた事などに文句を言う学生や、既に友人知人が沢山いるから今更新たな友達作りはしたくないという学生が出て来るであろう。これは、1章で書いたように、筆者が必修クラスで学籍番号順に座らせたところ、ほとんど全員が居眠りをしてしまい失敗に終わった事からも、必修クラスの座席指定は危険がつきまとう事がわかる。

また、万が一、その大学全ての教師が座席指定を採用するという偶然が起きてしまったら、好きな友達と好きな席に座って勉強する事を楽しみにしている学生達の全ての楽しみを奪う事になり、かえってやる気を無くす学生が座席指定導入以前よりも増えてしまう可能性も否定出来ない。

座席指定にすると、多少の細かい問題は生じるものの、自由・楽へとすっかり流され切っている最近の学生達を目覚めさせる良い刺激を与えている事は間違いなく、面倒ではあるが座席表を作る事になるのでしっかり学生の名前を覚えられ、教師と学生の距離も近くなってくるであろう。また、島田の研究の自由記述式のアンケート結果には、「友達関係のしがらみや席取り合戦等の面倒な事から解放されて勉強に専念出来る、たとえ前に座ってもそれは先生に決められた事なので、決して真面目でダサイ奴という変な目で見られずに済む」という解答があり、座席によるストレスから解放されるという大きなメリットもある。故に、座席指定などの形を取って、積極的に教師の方から学生の領域に介入してコントロールし、面倒を見る事がいかに今の時代大切かわかる。

#### 4.2. 筆者流解決策

座席指定であまりにもカッコリと席を決めてしまうと、学校で友人達とそばに座って授業を受ける事を唯一の楽しみにしている学生達のやる気をそいでしまったり、必修科目の際に不都合が生じたりするので、筆者が最善と考える座らせ方は、1章でも少し述べたように、クラス人数に対して教室が非常に広い場合は、絶対に真ん中より後ろの席に座ってはいけないという指示を出す方法である。座席指定の時よりは多少私語も生じる事にはなるが、仲良しと離れ離れになる事が無い為、周りに友人が居な

い寂しさから眠ってしまう者は居なくなる。また、全員が真ん中より前方に座れば、教師は全員を見渡せるので、自由席の場合の質の悪い後方座席のように授業態度が悪くなる事態も回避出来る。そして、全員が前半分に納まる為には、1列目や2列目という真面目エリアに座る学生が出て来るのは当然の事になるので、最前列に座る事＝真面目でダサイというイメージも薄れて自然に消えてしまう。

しかしながら、これではまだ不十分である。やはり、1・2列目にはどうしても座りたくないという事で、1・2列目以外の場所を取ろうとする席取り合戦が結局は起きてしまい、少しでも出遅れてしまった学生達は、最前列に座らなければならない悲劇にすっかり落ち込んでしまい、不貞寝するケースが多くなってしまう。こうなると、発想を変えてみればどうだろうか。教師の命令で無理やり前方に座らせるのではなく、自ら進んで前に座りたくなるような方法を考えるのが一番である。つまり、自分の意志で前に座りたいと思わせるよう仕向ける工夫が大事なのである。

そこで、座席の事よりもまず先に、授業を発言ポイント制にしてみる。テレビのクイズ番組に例えるならば、教師は問題を出す司会者で、学生達は全員解答者になったような感じで、教師が学生達にする質問に対し、わかれば挙手して発言してもらい、その学生には正解ごとにポイントが入る。学期ごとにクラス全員にポイントを競ってもらう。その時に、ポイントが入るのは発言のみならず、教室の1・2列目に座ってくれば、座っただけで毎回1ポイントもらえるという制度にする。このようにすれば、学期の最初の頃に固まって後ろに座っていた学生達も、まるで別人のように毎週競って休み時間早めに教室に来てまでも、ポイント欲しさに、1・2列目の席を確保する事に必死になり、大学に入ってから後方座席しか座った事の無かった学生ですら思わず最前列デビューをしてみたくなるようなワクワクした気持ちにさせる事が出来る。

また、教師の側としては、誰が何ポイント取ったのか記録する必要が出て来る為、必然的に学生全員の顔と名前も覚えなければならなくなる。一旦、名前と顔を覚えてしまうと、学生一人一人の性格や授業内容の理解度までも自然に見えてくるので、学生との心的距離は非常に近くなってくる。



そして、常に質問しては答えてもらうという、双方が語り掛ける形になる為、教師が講義だけをするという一方通行授業ではなくなり、学生と教師の物理的・心的距離両方も更に近くなり、クラスに一体感も出てくるようになる。

しかしながら、問題点が全く無いわけではない。1クラス100人以上の大クラスともなると、全員の顔と名前を覚えるのは容易な事ではないし、それだけの大人数の中で発言するのは大変な勇気を振り絞らない限り無理な事である為、発言ポイント制が機能しなくなるであろう。また、授業の特性上、いちいち学生達に問いかける暇はなく、次から次へと学生の全く知らない新しい事を一方的に講義しなければならない科目となると、筆者の方法は全く機能しない。そして、板書を沢山する場合や、スライド・OHP・プロジェクター等を利用する授業で、黒板やスクリーンを全員がきちんと見えるようにする必要がある場合は、筆者のように全員が前方に詰めて座る方法では、スクリーンが見にくい等の不都合が生じてしまうであろう。

しかし、筆者は過去に90人近くの受講者が居た選択科目で、必死に全員の顔と名前を覚え、1・2列目に座った学生にはポイントを加算し、多くの学生に自主的に教室の前方に座りたいと思わせる事に成功した事がある。故に、クラス人数の問題は教師の努力次第で何とか乗り越えられるものと考えてる。

つまり、筆者のような発言ポイント制まで導入出来なくとも、まずは学生の顔と名前を覚え、教室後方には極力座らせないような指示を出すだけでも、かなりの効果が期待されるという事である。そして何より大事なのは、沢山の学生に集中度を高めて聞いてもらえる良い授業を追究したいのであれば、授業内容のみならず、それ以外の要素(席順など)にも工夫をこらし、積極的に学生の中に入って行き興味を持つ事である。出来るだけ多くの大学教師がそのような努力をすべきである。

## 5. 結論

本稿では、島田(2001)の研究を紹介する事を中心に、現代大学生の座席事情(特に後方座席の人気集中)、また、そこに潜んでいる学生心理を概観し、後方座席に逃げる学生を引き止め、もう一度授業に

集中してもらう為に、これからの大学教師には何が必要と求められて来るのかを述べて来た。

何とか学生達に授業態度を改めてもらい、きちんと授業を聞いてもらいたいという、教師の願い・姿勢は今も昔も変わりはないのだが、ただ、今までの場合は、何とか自分の力で立ち直ってほしいと学生の自主性に全てを任せてしまったり、ひたすら授業内容だけを改善して学生の注目を浴びようとしたりするような対処しかされて来なかった。どんなに教師側がこのような努力をしようとも、それに比例するかの如く、学生の授業態度が日々悪化して行くのは、大学・教師側が学生に与えた大人としての自由・自主性を学生達が正しく理解できず悪用したからであり、また、その乱用ぶりに教師達が気付かなかったり、あるいは気付いていても放任してしまったからである。

学生が自分自身の力で自主的に立ち直り授業態度を改めてもらうのを、いくら、辛抱強く待ってみても、もはやどうにもならない程、現代大学生は「自由」に溺れ、自分で自分をコントロール出来なくなっている。自主性が養われるどころか、自由を乱用した結果、友達関係や座席の奇妙なイメージ等に振り回され、流されている日々を送っている。

このような悪循環にどっぷり漬かってしまっている学生達を救うには、授業内容の改善だけではなく、まずは、与えすぎてしまった「自由」の回収から始めなければならないのではなかろうか。具体的には、前章で紹介したような、中学・高校時の座席指定や、発言制の授業に戻し、クラス全員の顔と名前を覚える事で、学生が悪用している自由を奪い返せるはずである。そのためには、まるで、中学や高校のクラス担任にでもなったような心構えで、学生一人一人を良く観察し、厳しさと思いやり両方を持って丁寧に接する事が、大学教師に要求される。確かに、現代大学生は何を考えているのか良くわからず、とっつきにくいところも多々あるだろうが、勇気を振り絞り、積極的に学生達の領域に足を踏み入れ、座席指定などのように学生の細かいところまで介入・規制していかなければならない。

特に、4章で紹介した2種類の対処法は、完璧というわけではなく、まだ議論の余地はあるので、そのようなアイデアを強く勧め、押し付けるわけではないが、どちらの対処法にしても、中学・高校の担

任の先生のように、丁寧できめ細やかな授業を学生達と常に近い距離で行いたいという姿勢・方向性を持っているという点では間違っていないと思われる。この方向性を維持しながら、授業内容以外の要素を自分なりに創意工夫して、後方座席に流されてはいるものの密かに SOS を送っている学生達を積極的に救うよう、一人でも多くの大学教師に心がけて頂きたい。

## 参考文献

- 1) 島田博司 2001 『大学授業の生態誌:「要領よく」生きようとする学生』  
東京:玉川大学出版